令和３年度 現職研修助成事業研修概要

「課題への見通しをもち、自ら学ぶ児童の育成」

～複式学習から学ぶ「一人学び」と「共学び」の支援の在り方～

萩市立育英小学校

１　主題設定の理由

（１）今日的教育課題から

急速に社会が変化する中、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断や異なる文化や歴史をもつ人々との共存、交流の広がりに伴うコミュニケーションの必要性など、児童には変化に対応する能力が求められている。

これらの現状を踏まえ、令和２年度から完全実施された新しい学習指導要領では、その中で育成すべき三つの柱として、「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」が示されている。そして、その資質・能力を身に付けるために、どのように学ぶかも重視され、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善が求められている。

そのためには、まず、児童一人ひとりが自らの考えをもつということが必要である。そのために、教師が「児童に学ばせるべきこと」を「児童が学びたいこと」に転換できるような授業をめざしていきたい。

また、児童が自らの考えをもつには、児童が見通しをもって主体的に学習を進めることが何よりも重要である。そのためには、見通しをもたせる導入や一人学びの時間の確保など、教師による支援の在り方を工夫していく必要がある。教師は、ただ単に児童に知識を「教え込む」のではなく、児童が「自ら学ぶことができる」ように授業をデザインしなければならない。そうすることで、児童は自ら主体的に学び、友達と進んで関わりあい、深い学びへとつながるであろう。

（２）これまでの研究と児童の実態から

本校は今年度より、５・６年生が複式学級となり、加えて知的の特別支援学級が新設された、学級数６、児童数４３人、教職員１１人の小規模校である。

本校では、令和元年度から共学びにおける「練り合い」を柱においた授業研究を進め、児童の学びを確かに深めつつ、他者とコミュニケーションを図りながら課題を解決することのよさを味わわせてきた。日々の授業研究により、本校の児童は友達の考えと自分の考えを比較しながら聞いたり話したりすることができるようになり、児童の学びが広がってきた。しかし、共学びの段階以前に、一人学びの段階において、児童は、学習の見通しがなかなかもてなかったり、筋道を立てて考えられなかったりして、課題解決が難しい面も見られた。

そこで今年度は、今後の複式学級化を見据え、これまで以上に主体的な学びにつなげるために、児童が自ら考え、自ら学習を進めていく授業をデザインする必要があると考える。その実現に向かうためには、わたりやずらしのある複式学習の授業の組み立て方や教師の関わり方等に学び、児童の自立に向かう学習への力を育むことが重要だと考える。児童が困ったらすぐに教師が出て解決するのではなく、単式学級においても仮想間接の時間を設定することで、複式学習における間接指導をイメージしつつ、児童一人ひとりが学びの主体者としての自覚がもてるような授業実践を積み重ねていきたい。GIGA スクール構想における一人一台タブレット端末の環境も活用し、児童にとってよりよい授業改善に結び付けていきたい。

２　研究の内容

これまでの経緯から、以下（１）（２）の２つの共通視点をもって授業実践を積むこととした。

本校が、２年後以降は継続的に複式学級が含まれる小規模校となることを見据え、全担任が一人一授業を行う中で研究テーマに迫り、質の高い授業改善に取り組むことにした。その際、業務の軽減化を図りながら研修が進められるよう、常に全教職員で取り組むのではなく、事前検討等は、小規模校ながらも低学年ブロックと中・高学年ブロックに分けて研修できるようにした。

（１）児童が見通しをもって一人学びができるための導入及び学習課題の工夫

・　どのような導入の工夫が、一人学びのヒントになりえるか。

・　どのようにすれば、児童が見通しをもって学習活動に取り組めるか。

（２）児童が学びを深め合う、共学びにおける支援のあり方

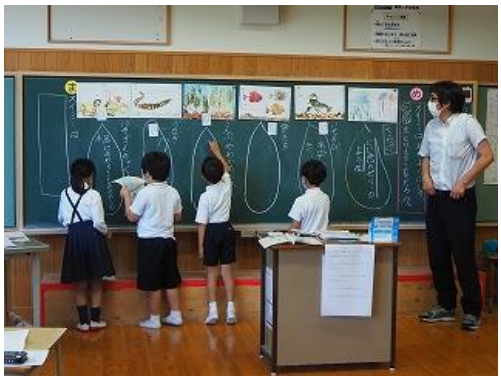
・　どのようにすれば、児童が自分たちで共学びを進めることができるか。

・　どのように教師が関われば、児童の共学びがより深まるか。

３　研究の実際

（１）６月２３日（水）第１回研究授業

第２学年　国語科「スイミー」　授業者　松浦　弘幸



年度当初、第１回目ということもあり、今年度の研究のしるべとなる提案ということで、教材研究や模擬授業を含めた事前準備のあり方を丁寧に行っての授業提案となった。

一人学びをする上で、スイミーの気持ちに個々が寄り添って読めるよう、心情メーターを活用したり、単式学級でもリーダーガイドを取り入れたりするなどし、児童が自分なりに学習の主体者となれるような取組ができた。

研究協議後の受指導では、講師に、やまぐち総合教育支援センターの椙田崇晴先生をお招きし、「複式学級における授業づくりと学級づくり」と題した講話をいただいた。年間を通じて取り組む複式学習の長所短所を含め、技法だけでなく、ベースとなる学級づくりの重要性を説かれた。「児童の学ぶ力の育成」と「支え合う学級集団づくり」の大切さは、単式であろうと複式であろうと変わらないことを改めて認識できた。

（２）９月１５日（水）第２回研究授業

第３学年　算数科「あまりのあるわり算」　授業者　中村　友之

一人ひとりが学習課題を理解できるよう、日常で余りが必要となる場面を想起させることができる問題を提示し、問題文の「分かっていること」「問われていること」に線引きする基礎基本を丁寧に行わせることで、主体的に問題に取り組む姿が見られた。

学習の基本語彙力を高めるため、既習事項を掲示しておいたり、半具体物を使った図と式を併せて説明する場を仕組んだりする中で、各児童が生き生きと問題に取り組んだり、説明したりする姿が見られた。

（３）１０月１３日（水）第３回研究授業

なかよし学級　自立活動「とんとんとん」　授業者　齋藤　恵子

在籍児童一人の学級なので、見通しをもって一人学びができるようにするために、絵本「とんとんとん」を使い、少しずつ変化をしながらも繰り返して学べる活動を仕組んだ。パネルシアターのような具体物や視覚的な支援を行うことで、児童が生き生きと学習活動に没頭する様子が見られ、学びへの興味を向けるように、徹底的に個に寄り添うことの重要性を再認識した。

また、授業者以外は別室で授業を参観できるようにzoomを活用し、児童が落ち着いて研究授業に取り組めるような設定をしたことも、児童が学習に集中して取り組む上で大変役立った。

（４）１１月２４日（水）第４回研究授業

第４学年　算数科「複合図形の面積の求め方の工夫」　授業者　坂本　日向子

既習事項と結びつけて考えることができるよう、「学びのあしあと」を掲示し、学習途中で困ったときのヒントを日常的にちりばめておく環境を用意し、見通しをもって一人学びができるように工夫した。

共学びの時間を確保するために、授業構想の中に仮想間接の場面を設定し、Ｌ字型の求積説明をする機会を複数回設定する工夫をした。

研究協議後の受指導では、講師に、山口市立大歳小学校（山口大学教職大学院）の椙山慎也先生をお招きし、「算数科として」「研究主題から」「学校経営的視点から」「学級づくりとして」の４つの視点からご講話いただいた。時間オーバーな面もあったが、意図した手物、場、授業システムをきちんと準備し、児童に適切な課題意識をもたせ、適切なハードルを共同活動の中で超えさせ、喜びの共有ができるように本気で考えたことは、決して無駄ではなく、研究の方向性に間違いはないと価値づけていただいた。

（５）１２月８日（水）第５回研究授業

第１学年　算数科「たすのかな　ひくのかな」　授業者　大田　睦美

教材研究で、教科書の加減に関する全問題を抜き出し、日常生活場面に置き換えた問題を用意することで、問題の内容を理解し、自分事として学習に取り組めるようにした。また、「学びのあしあと」の掲示や、問題文の捉えを下線で表す等、これまでの研究成果を生かした授業を展開した。

共学びの際、自分なりの考えを、具体物を用いながら説明し合うことができるよう、１年生４名が交代して操作活動をしながら説明できる大きさのワークシートを用意した。教師の出番は、児童の表現が稚拙な場合の通訳のような位置づけだと確認した。

（６）２月２日（水）第６回研究授業

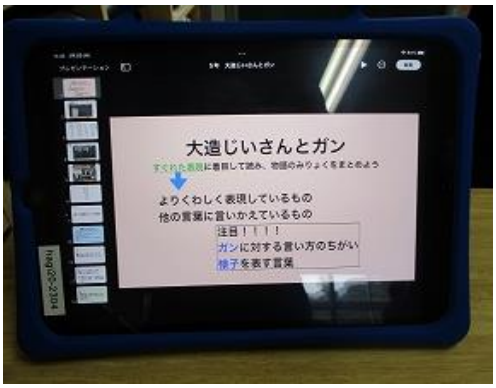
第５・６学年　国語科「大造じいさんとがん」（５年）

国語科「海の命」（６年）　授業者　芳川　千紘

徹底的な教材研究・解釈、既習事項を生かした学びの足跡の掲示等、これまでの研究で得られた成果を取り入れた実践だった。一人一台のタブレット端末環境を生かし、これまでの学びをプレゼンテーションソフトのデータに集め、意味が分かりにくい言葉の視覚化、複式学習で使われる学習ガイドやリーダーガイドの提示、ヒントカード等を、デジタルのレベルでも取り入れ、教材研究や授業構想、既習事項等、全てを集約したデジタルポートフォリオとしての活用方法を提案した。これまでの仮想間接と違い、複式学級ゆえのリアルな間接指導、両間接の時間設定等、深い学びの得られた授業研究となった。

研究協議後の受指導では、講師に、萩市市教育委員会複式学習指導員の松永隆幸先生に、研究主題への迫り方についての講評をいただいた。年間を通じて、本校の複式学習の指導支援に来られている先生なので、日頃からの取組をもとに、価値づけしていただいた。特に、「つかむ・見通す」「一人学び」「共学び」「活用・振り返り」という指導過程は、複式指導でも単式指導でも基本的には変わらず、今年度のテーマ設定と教職員の積み重ねによる研修の取組への一定の評価をいただいた。両間接指導の際の担任の立ち位置や、共学びで児童だけでは停滞してしまうときこその教師の出方や、児童の表現をつなぎ、広げ、深めるための言葉がけについてもご指導いただいた。今回取り組んだ異学年同時振り返りについても一定の評価をいただいた。

（７）ＩＣＴ機器の活用について



上記（６）で示した、タブレット端末をデジタルポートフォリオとして活用する試みは、児童一人ひとりが手元でガイドを見たり、既習事項を確認したりすることのみならず、教材研究したことをそのまま共有データに挙げることで、児童一人ひとりに印刷物を用意する必要がなくなり、業務改善にも寄与した。

また、今回の事業で購入した AppleTV を導入したことで、ワイヤレス環境で瞬時に各端末が画面に提示できるようになり、ケーブル差し替えによる学びの流れを止めることなく学習が進められるという大きなメリットを得ることができた。

４　研究のまとめ～今後の課題

上記３の研究の実際に記したように、一人一授業の組織的な取組により、回を重ねるごとに積み重ねたものを生かした授業展開が得られた。一方で、複式授業経験がある者が、複式学習をイメージして授業をつくるのと、複式授業経験のない者が、授業計画に仮想間接を取り入れるのとでは、授業構想にどうしても差が生じてしまう課題が残った。小規模ゆえに教員はすぐに困っている児童の支援に向かえるが、だからこそ、本当に必要な教師の支援とは何か、出番はどこか、さらに突き詰めて考えていく必要があるという課題が残った。今後も、単式学級にも複式学習のメリットの部分をさらに取り入れ、全校体制での取組精度を高めていきたい。